

## ■研究調査レビュー

「島嶼王権」の形成と海域世界  
ー比較考古学と比較史の視点からー  
新田 栄治（鹿児島大学法文学部）

沖縄が王権を形成し、琉球王国という国家形成にいたったのに対し、奄美は先史時代以来、その歴史像が一般的には明確ではなく、中世には琉球王国の版図に入り、近世には島津氏の直轄支配を受けることによって琉球とは切り離された。大陸や日本本土とは異なる島嶼において、王権はどのように誕生し、国家形成がなされていったのであろうかという問題は、東南アジア、とくに大陸東南アジアの先史考古学を研究テーマとし、近年の関心が東南アジアの王権と国家形成の問題に移ってきた私にとって、解答するのがとても難しい問題となって今に至っている。

王権をどのように理解するか。ここでは、システム化された政治権力の世襲あるいは継続したものを王権と定義することにする。

本論では、かつて海域東南アジアにあった王国を形成した民族と、王国を作らなかった海民たちとの比較を通して、奄美と沖縄における王権形成の問題について考えてみたい。

#### (1) 貝交易における沖縄と奄美

沖縄における貝塚時代後期（すなわち本土での弥生時代相当の時代）、沖縄と九州本土とを結ぶ貝の交易が盛んに行われていた。これらの貝は、弥生時代に九州北部で流行していた貝製腕輪の素材となるゴホウラ、イモガイなどの海水温の高い南海に生息する巻貝である。

原料産地である沖縄では、九州北部でのこれらの貝製腕輪原料となる巻貝に対する需要の高まりに対してシステム化した対応を行うようになる。それは、ひとつには素材である貝に粗加工を加えた半製品として前加工する

ことであり、ふたつにはこれらの前加工した半製品である貝を交易基地に集積しておくことであった。こうすることにより輸送上と出荷上の便宜を図ることができた。

新里貴之氏によると、このような交易基地となる拠点集落には、九州本土から搬入された青銅鏡や鉄製品、ガラス玉などの奢侈品が出土するという。同時に、奄美から持ち込まれた土器も出土する。さらに拠点集落と各地の集落を結ぶ交易品のネットワークができていたと推定している。沖縄内部での集荷と分配のネットワークである。九州本土および奄美からの交易品はこのネットワークに乗って動き、同時に原料の貝殻はこのネットワーク上を逆方向に動いたと想定している。したがって、集配の分岐点にある集落、さらにはその長の機能は強化されていくことになる。つまり、拠点の長はその権力を強化できていく方向に変化する。逆にそうでないところは、相対的に弱体化するだろう。

これらの集落は主として本部半島より南の、北部と比較すると平坦地の多い地域に多く分布しており、交易適地であると同時に居住適地であるところに人口の集住化現象が進行していたことが推定できる。人口の集中するところに、政体が生まれるのが歴史である。中世以降の沖縄において地方政体が分立するが、拠点集落が位置しているところは、それらの分布と重複するところが多いのも故あるところであろう。

近年の調査研究の進展から推定できることは、素材産地である沖縄と、消費地である九州北部とを結んで、奄美の人々が海上中継交易に携わっていたということであり、当時の

奄美の人々はまさに海民と呼べる人々であった。

この時代の沖縄と奄美とを比較した場合、奄美は中継貿易を担う海民としての漂海民であり、王権の形成からは程遠かったのに対し、域内での交易のシステム化した対応と後背地の大きさから、沖縄は部族社会や首長制社会のレベルを抜き出て王権形成に至る可能性を持っていたと推定できる。しかし、首長制社会や、まして王権形成が行われたわけではない。王権形成には内部的要因と遠距離交易を起爆剤とした外部的要因とが必要である。

「島嶼王権」を形成し、「海の領主」となりえた東南アジア海域世界の例を次に見ていこう。

## (2)「海の領主」と王国、そして海民

東南アジア大陸部では、後1世紀末ころから国家形成が行われた。カンボジア南部にはフナン（扶南）、ベトナム中部にはチャンパ（占城）などである。これらはインドおよび中国との遠距離交易の活発化を起爆剤として、インドからの新しい思想を導入することによってヒンドゥー的王権および国家形成を成し遂げた。これらの国家については中国側漢文史料のなかになんか詳しい記述が残されており、考古資料とともに、その実態を知ることができる。

大陸部では6世紀以降、各地に王権と国家形成が行われた。タイ湾沿岸とチャオプラヤー流域においては仏教を基礎とした都市国家の連合体であるドヴァーラヴァティーが現れ、商業ネットワークに従って、東北タイにまでその都市は拡散していく。また、ジャワをはじめとするジャワ海沿岸でも同様であった。これらの王権と初期国家は、いずれも紀元前後ころから活発化した中国・インドから東南アジア産品を求めてやってくる外世界からの貿易商人と、彼らがもたらす新しい思想や宗教が大きな要因となって成立したもので

ある。王権の正当性原理にヒンドゥーのデーヴァラージャ（Devarajah、神聖王）の思想を導入し、あるいはまた仏教の庇護者として統治の正当性を主張したのである。

いっぽう東南アジア海域世界のなかでも、その東部では国家形成はかなり遅い。もっとも早く国家形成をなしたことが推定できるのは、ブルネイ（勃泥）である。ブルネイが歴史に登場するのは971年のことで、このとき南宋に朝貢した記事が見えるが、まだ部族社会あるいは首長制社会のレベルであり、王権あるいは国家形成がなされていたわけではないだろう。

ブルネイが隆盛を誇り始めるのは、東南アジア東部海域で産出するスパイス貿易の中継地として、中国からの貿易航路の中継港としての位置を占めて以降であり、南宋の1225年に記された東南アジア諸国の貿易品と旅行のガイドブック『諸蕃志』では、ブルネイに1万人以上の住民が居住していたことを記している。もちろんすぐに信用できる数字ではないが、相当数の人口を擁した港市であったことは間違いない。中国とブルネイを結ぶラインを東洋と西洋の境界線とする地域区分がなされたのも理由があったのである。

その後、ジャワの強大なヒンドゥー王国マジャパヒトの影響下におかれ、間接的にヒンドゥーの影響を蒙っていたと思われる。

王国としての国家形成は、1511年にポルトガルの占領によりムラカ（マラッカ）王国が滅亡してムスリム商人がブルネイを避難先のひとつとした後のことであり、イスラーム化することによってブルネイの王権と国家が確立したといえる。ブルネイの王権と国家形成には広域貿易の活発化に伴う中継地としての機能の強化と、イスラームという外世界の思想による支配の正当化とが必要であった。したがって、貿易の中継地としての役割を失うと急速に没落することになった。

これとは別に、貿易中継地ではなく、自分

のところに貿易品として非常に価値のあるものを産出する場合はどうか。

香料諸島の名があるスパイス産地として有名なマルク（モルッカ）諸島には、16世紀以降、小王国が分立した。マルク諸島は当時世界唯一のクローヴ（丁子）の産地であり、ナツメグ（ニクヅク）とあわせて重要な輸出商品であった。いずれも肉料理の香辛料として不可欠のスパイスであった。つまり、マルク諸島では自分のところで産出する世界的な輸出商品に恵まれていたのである。このことが、ブルネイとは異なる。北マルクにあったふたつの小王国、テルナテとティドレはその代表的な王国である。これらの「王国」は本来ならば国家としてなりたつようなものではなく、ビッグマンがカリスマ性をもって統治する部族社会の一例として存在するような政体である。しかし、クローヴとナツメグという世界商品を産出することが王権と国家を作り上げることになったといえる。また王国間には、婚姻関係を結ぶことにより王国間の関係の円滑化を図っている。

中国や東南アジア各地からの貿易商人が来航し、各地の港で分散的に集荷していた15世紀以前の状況が大きく変化したのが16世紀以降のヨーロッパ人の来航以後である。分散的な集荷レベルであれば、中央集権的な王権は生まれない。小さな政体が散在するのみである。しかし、ヨーロッパ人の貿易スタイルは特定の港に大量に集積された商品を一括して購入するという、近代的な効率のよい方法であった。そのため、輸出品の集荷と外来品の再分配のためのセンターを構築する必要が生じ、その結果としてセンターの他の港湾に対する相対的な優位と、センターを統治する者のほかの小政体を統治する者に対する政治経済的優位が確立することになる。さらにこれらの貿易システムの維持のために、国内での統制を進め、維持すべきシステムに反するものは排除するようになる。ここに部族社会

から王権の誕生と国家の成立が生じたのである。

早瀬晋三氏のいう「海の領主」や海の小王国はこのようにして誕生した。このような小王国は東南アジア東部海域世界にいくつも生まれ、お互いに貿易上の優位に立つべく抗争を繰り返し、ヨーロッパ人の貿易上の都合が変わることによって衰亡していった。

東部海域世界の小王国ではなく、大島嶼であるジャワでも、ジャワ西部北岸にあったイスラーム王国・バンテン王国のケースは、胡椒をはじめとした東部海域から集められたスパイスの二次的集荷地として、オランダとの貿易によって繁栄し、そしてそのために17世紀にはオランダの傀儡国家となって衰亡した王国である。

東南アジア海域世界は、このような王国のみから成り立っていたわけではない。各地の港を結んで海上輸送に従事したり、あるいは海賊となる海民の存在があった。王はこれらの海民を支配下において海上活動に利用し、また海民のほうも独自の活動を行うことも多かった。

国際商品の産出と集荷、中継貿易の基地をもとにして成立した島嶼王権と国家が東南アジア海域世界に多く見られること、それらを仲立ちとした海を自在に往来する海民の存在、島嶼王権が成立した要因が時代の衰亡の要因になっていくことを見てきた。

沖縄ではどうか。弥生時代相当期以降、本土での古墳時代～中世の沖縄の歴史はもうひとつ明瞭ではない。古代からグスク時代と呼ばれる時期である。各地に城砦としてのグスクが構築され、武力抗争が頻発していた時代だといわれる。同時に、グスクからは中国陶磁器をはじめとする輸入品が大量に出土する。このことは島内の各地に小政体が形成され、外部との交易のチャンネルは複数（多数）あったことを示すものだろう。散在する交易チャンネルの整理と統合こそが王権が目指すもの

であり、王権にしかできない。沖縄本島の統一政権樹立の一側面は、貿易チャンネルの統合と管理にあった。体外的な補完のために、統治者層は貿易関係をもった外界の同じ統治者層と婚姻関係を結ぶことを企図するようになる。東南アジア海域世界の王国のケースと同じことである。その場合、婚姻によって動くのは王妃となる女性である。沖縄の最初の統一王国である第一尚氏の王墓の発掘調査の正式な報告は未刊だが、その意味でも、女系を伝えるミトコンドリアDNA分析の結果は、これらのことを読み解く重要な情報を提供してくれるだろう。もし、そうであれば、海域世界の王国の論理はきわめて似た部分があるだろう。

### (3) アユタヤ、そして再び沖縄、奄美

東南アジア大陸部の交易国家として最も重要なのは14世紀から1767年までチャオプラヤー川下流にあったアユタヤ王朝である。15世紀～16世紀、琉球王国がもっとも頻繁に貿易を行った東南アジア地域がアユタヤである。アユタヤ王朝とは、万世一系の王朝ではなく、王国の誕生から滅亡にいたるまで、幾度となく異なった王家が断続しながらも、一貫してチャオプラヤー川の下流にある島状の中洲・アユタヤを王都としていたことから言われる国家である。

この地が王都であり続けた理由は、貿易商品の集散地として地政学的に最も優れた地であったからである。アユタヤの地はいくつもの中小河川の合流点であり、アユタヤの後背地にはこれらの河川によって結び付けられた広大な内陸の大地があった。東北タイを代表とする森林産物の供給地をはじめ、すべての内陸地域からアユタヤへ向けて物資が集められた。また、アユタヤからは大型のジャンクがチャオプラヤー川を上下して、タイ湾と結ばれ、さらにその先にはベンガル湾からインド、南中国海から東中国海、さらに中国や日

本と結びついていた。このようにきわめて広い海陸の貿易網の中心に位置したのがアユタヤである。同時に広大な農地から収穫される米は、自国内だけでなく、ムラカをはじめとするマレー半島に向けた食料輸出の源でもあった。マレー半島を境界とした東側に中国海（中国のシーレーン）と、西側にベンガル湾（インドのシーレーン）の双方に出入り口を持っていたこともアユタヤの重要性を際立たせている。

アユタヤが琉球と密接な貿易関係を結んでいたことは周知のことである。琉球はアユタヤから東南アジア産の商品（コショウ、後には鹿皮、鮫皮（実はエイの皮）、蘇木など）を輸入して、中国、日本、朝鮮へ再輸出した。これらのことについてはすでに岩生成一氏が詳細に論じているので、これ以上触れない。

アユタヤと琉球、それに中国・日本の関係は、今で言う、東南アジア産品の生産者と仲買ブローカーと消費者という関係として理解できる。ただし、この蜜月が維持できたのは当時の中国・明が自国民の海外進出を禁じる海禁政策をとっており、中国人貿易商人が公然と海外に貿易をしに出かけることができなかったからである。アユタヤの海外貿易のチャンネルは琉球だけではなく、最大のパイプは中国貿易であったし、インド、アラブ、ヨーロッパとも貿易チャンネルを持っていた。海禁がなくなれば当然、産地と消費地の直接取引に戻り、仲買ブローカーは排除される。

また、アユタヤの経済力が沖縄と違う点は輸入代替品から輸出品生産への自国産業の育成を行ったことである。海禁により中国陶磁器が輸出できなくなった間隙について陶磁器生産を行い、国外へ大量に輸出もしている。タイ湾沿岸にはアユタヤの手工業製品や森林産物、鉱産物などを満載した沈没船がいくつも発見されているが、これらの事実はアユタヤの経済力を示している。

多様な貿易チャンネルの一本化と統制に成

功し、時代の趨勢を利用した中継貿易により国家形成と貿易国家の隆盛をなしとげた沖縄と、多様な貿易チャンネルを纏め上げなかった奄美とは、対照的である。同時に沖縄とアユタヤの関係も対照的である。

#### (4) 沖縄・奄美の歴史再構築に東南アジア海域世界からの視野も

東南アジア海域世界にいくつも現れては消えていった海の王国たちは、島嶼の王権と国家形成の問題について多くの示唆を与えてくれるように思う。これまで、南西諸島の王権や国家形成の問題について、日本や中国との関係を視野に入れた論考は多数にのぼる。しかし、東南アジアさらには東南アジアの海域世界、しかも海域世界東部を視野に入れた論考は皆無と思う。

近年、沖縄ではグスクのほかに、第一尚氏の王家の墓とされる浦添よーどれの発掘調査が行われ、その成果に多大な期待がよせられている。また、奄美においても、大規模な遺跡の発掘調査が行われている。

従来の視野とは違った視点からの、より広い海域世界からの視野が、今後の南西諸島の考古学・歴史学研究に必要とされる日がすでに来たと私は考えている。

(本論の性格上、詳細な註と参考・引用文献リストは省略しました。)

#### 参考文献

- 生田 滋 1998 『大航海時代とモルッカ諸島』中公新書。中央公論社。  
 石井米雄 1999 『タイ近世史研究序説』岩波書店。  
 岩生成一 1966 『南洋日本町の研究』岩波書店。  
 岩生成一 1985 『朱印船貿易史の研究』吉川弘文館。  
 木下尚子編 2002 『先史琉球の生業と交

易』(科研費報告書) 熊本大学文学部。

- 重久淳一 2004 鹿児島県内から出土したタイ・ベトナム陶磁。東南アジア考古学会編『陶磁器が語る交流—九州・沖縄から出土した東南アジア産陶磁器—』47-66。東南アジア考古学会事務局。  
 新里貴之 2001 物流ネットワークの一側面—南西諸島の弥生系遺物を素材として—。「南島考古」20.49-66。  
 関本照夫 1987 東南アジア的王権の構造。伊藤亜人・関本照夫・船曳建夫編『現代の社会人類学』3. 3-34。東京大学出版会。  
 新田栄治 1993 東南アジアから見た沖縄。森浩一・佐原真監修『考古学の世界』5.214。ぎょうせい。  
 新田栄治 2002 初期国家形成期の東南アジア。「鹿児島史学」47.115-123。  
 新田栄治 2003 東南アジアにおける王権の誕生。角田文衛・上田正昭監修『古代王権の誕生』2。角川書店。  
 早瀬晋三 2003 『海域イスラーム社会の歴史—ミンダナオ・エスノヒストリー—』岩波書店。  
 広瀬和雄 2003 『日本考古学の通説を疑う』洋泉社。  
 Dhida Saraya 1999 *Dvaravati — the initial phase of Siam's history*. Muang Boran Publishing House. Bangkok  
 Maspero, M. Georges 1928 *Le Royaume de Champa*. Librairie Nationale d'Art et Histoire, Paris et Bruxelles.